# 漱石とオフィーリア

Junko Higasa

夏目漱石といえば、英文学者として勤務先の東大で既定の講義枠とは別に自ら率先して行った「シェイクスピア」講義が人気を博した。そして彼の小説の中に繰り返し現れるのが戯曲「ハムレット」の中のオフィーリア(Ophelia)である。このオフィーリアは多くの画家たちの題材として採り上げられたが、中でも漱石が採り上げるのはロンドンテート美術館にあるラファエル前派を代表するイギリスの画家ジョン・エヴァレット・ミレーの「オフィーリア」である。ミレーはテムズ川の支流ホッグスミル川(Hogsmill River)でスケッチし、自宅のバスタブでモデルを描き、背景にオフィーリアの象徴として植物を描き加えた。花言葉は数種あるが、柳(わが胸の悲しみ・見捨てられた愛)イラクサ（苦悩）ヒナギク(無邪気)パンジー(物思い)、首飾りのスミレ(誠実)ケシ(死)というところだ。余談だがモデルが風邪を引き、家族から治療費を請求された。

因みに戯曲「ハムレット」の内容であるが「デンマーク王が急死して幽霊が出るという噂が立つ。王子のハムレットは霊に真相を確かめる。王は弟クローディアスによって毒殺されたのだった。クローディアスは王妃と結婚して政権を握る。復讐するために狂気を装うハムレット。彼の様相に戸惑う恋人オフィーリア。彼女の父である宰相ポローニアスは狂気の真相を探るようにオフィーリアに命じる。ハムレットは彼女を冷たくあしらう。ハムレットが王妃と話しているのを盗み聞きしていたポローニアスは、クローディアスと間違えられてハムレットに殺されてしまう。度重なる悲しみにオフィーリアは気が狂い川に身を投じる」という政治に愛を翻弄された悲劇である。

漱石はこのオフィーリアを繰り返し小説の中に描く。「水瓶の中に浮く『猫』の吾輩」地上ではあるが「黒髪をあるに任せて枕に流した『虞美人草』の藤尾の亡骸」その死は明らかにオフィーリアの姿を連想させる。そして特に『草枕』ではオフィーリアが繰り返し登場する。山路を登っていく画工が、雨に降られて寄った茶屋で聞いた村の伝説「淵川に身を投げた長良の乙女」これから向かう宿の「那美さんの輿入れ」の話から想像した花嫁の顔。那美さんが望んだ絵姿。画工は第七章で「何であのような不愉快な所(川)を選んだのか」と平生苦にしていたミレーのオフィーリアが画になることを了解する。『水に浮んだまま、あるいは水に沈んだまま、あるいは沈んだり浮んだりしたまま、ただそのままの姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない』誰にも拘束されない真実の愛を自分の胸に抱いて、自然に即して流れていくのであれば、たとえどのような流れに浮かぶとも沈むともその姿は美しかろう。それは藝術に相違ない。

そしてまたナルシスを象徴する「鏡」も漱石の作品に繰り返し登場する。『草枕』第九章で、那美さんにどこへ行ってきたかを尋ねる場面では「鏡の池」が登場する。誰も愛せなかったナルシスは鏡の中の自分を愛するように仕向けられた。そこから漱石は再びオフィーリアへと導き、こんな二人の会話を引き出す。『画をかくには好い所ですか』『身を投げるに好い所です』那美さんは言う。『私が身を投げて浮いているところを―苦しんで浮いているところじゃないんです―やすやすと往生して浮いているところを―奇麗な画にかいて下さい』政治の人形のように「結婚」「離婚」を押し付けられた那美さんの顔から苦悩を消すのは川ではなく、自分を映す「鏡」でなければならない。「鏡の池」「鏡が池」二通りの表現は漱石の書き間違いではあるまい。(2013.4.14)